

てんま天神梅まつり散策と梅香席鑑賞

2004年2月8日 日曜日 午後2時～7時

第一部：てんま天神梅祭り散策

案内：天満宮文化研究所研究員・天満天神お伽衆

永原順子さん

第二部：てんま天神梅香席

林家花丸・桂春之輔・旭堂小南陵・笑福亭福笑・桂文枝

日本三大夏祭りとして山王祭(日枝神社)、祇園祭(八坂神社)に並んで称される水の都の夏を飾る大阪天満宮の“天神祭”。その大阪天満宮をゆっくりと散策し、今年初めて開催される「大盆梅展」。書院造り百畳敷きの参集殿に飾られた樹齢200年の梅の古木、各種盆梅展を見学後、天神さんに関する落語・講談5席を梅香席で楽しみました。

第一回てんま天神梅まつり

会期：2004年2月7日(土)から、3月7日(日)

関西最大級「大盆梅展」開催：拝観料：大人500円(中学生以上)・小学生300円・幼児無料

掛け軸：**束帯天神像**(展示物より)



天神画像は、一般に束帯天神と、渡唐(宋)天神に大別される。この天神画像は、黒塗りの垂纓の冠を被り、黒の袍と下襲を着用し太刀をしているので「束帯天神像」に分類すべきである。しかし、左手には「渡唐天神像」が持つはずの梅の枝を持っており、画面上部の色紙形には、近衛信尹の渡唐天神像にしばしば用いられている有名な画賛がみえる。束帯天神像で梅の枝を持つ作例は極めて珍しく、この作例以外、これまで紹介されたことはほとんどない。

てんじんさん(菅原道真公)の歴史とは、

菅原道真公は、承和12年(845年)に菅原是善(すがはらこれよし)34歳の子として誕生されました。(6月25日と伝えられるが定かではない。)

生誕の地は、京都市上京区烏丸下立売の菅原院天満宮の社地とされているが正確にはわかっておりません。

菅原家は、天穂日命(あめのほひのみこと)を祖とする土師氏(はじし)であり、有名な14世の野見宿禰(のみのすくね)の子孫でもあります。

祖父の清公(きよきみ)、父是善(これよし)ともに学者の最高位である文章博士(もんじょうはかせ)に任命されましたが、道真公も33歳という若さで文章博士に任命されました。

道真の幼名は、「阿呼(あこ)」といい、幼少の頃はひ弱であったという事ですが、5才の時、庭に咲く紅梅を見てその花びらで自分の頬を飾りたいと、『**美しや紅の色なる梅の花あこが顔にもつけたくぞある**』と歌い、11歳(斉衡2年/855年)には、初めて次のような漢詩を詠んでいる。

月耀如晴雪 梅花似照星

(月の輝きは晴れたる雪の如し 梅の花は照れる星に似たり)

可憐金鏡轉 庭上玉房馨

(憐れむべし金鏡転じ 庭上に玉房香れるを)

(お月さまはきらきらがやく雪みたい 梅の花はびかびか光る星みたい ああすてき空にはお月さまの光がきらめき 庭には梅のいい匂いがただよっている) 母は、神代以来の名家大伴(おおとも)氏の出であるが、淳和天皇の御代に、大伴氏は伴と改姓した。

また、大伴は元々武将の家柄であるが、旅人、家持、坂上大、嬢等の有名な歌人も輩出している。

貞観 元年(839年) 15歳で、元服。文章生を目指して勉強した。

貞観 4年(862年) 文章生となる。(定員20名)

貞観 9年(867年) 文章得業生(文章生の中より才学抜群の者2名)

貞観12年(870年) 方略試に合格。(中上の成績で及第)

貞観19年(877年) 式部少輔に任ぜられる。同年改元(元慶元年)文章博士を兼務。

元慶 4年(880年) 父・是善没。

仁和 2年(886年) 讃岐守となり任地に着く。道真42才

寛平 2年(890年) 讃岐守の任を終え帰京。その後、病氣療養に努める。

寛平 4年(892年) 『類聚国史』を編纂。

寛平 6年(894年) 遣唐使に任命させしが、自ら遣唐使の停止を奏上。

寛平 9年(897年) 藤原時平、大納言・左大将。道真、権大納言・右大将。

昌泰 3年(900年) 重陽の宴に侍して「秋思」の題の勅命に応え詠んだ詩。

丞相度年幾楽思

(じょうしょう年を渡りて幾たびか楽しむ思へる)

今宵触物自然悲

(今宵は物に触れて自然(おのずから)らに悲しむ)

声寒絡緯風吹処 (声寒ゆる絡緯は風の吹くところ)

葉落梧桐雨打時 (葉の落ちる梧桐は雨の打つ時)

君富春秋臣漸老 (君は春秋に富み臣は漸くに老いたり)

恩無涯岸報猶遲

(恩は涯岸無くして報いむことはなほし遅し)

不知此意何安慰 (知らずこの意何れにか安慰せむ)
飲酒聴琴又詠詩 (酒を飲み琴を聴き又詩を詠ぜむ)

昌泰4年(901年)正月25日。突如として大宰権帥に左遷されることになる。

延喜元年(901年)2月1日京を發ち太宰府に下向す。道真が、自邸を去るときに詠んだ歌

「東風吹かば匂いおこせよ梅の花
主なしとて春を忘るな」

三代勅撰和歌集の一つ『拾遺集』によまれている。
『大鏡』では、第五句を「春な忘れそ」あとある。

「九月十日」(仲秋の日配所で詠んだ漢詩)

去年今夜侍清涼 (去にし年の今夜 清涼に侍りき)
秋思詩編独断腸 (秋の思ひの詩編 独り腸を断つ)
恩師御衣今在此 (恩師の御衣は今此に在り)
捧持毎日拜余香 (捧持ちて日毎に余香を拜す)

延喜 3年(903年)2月25日 59歳にて薨去。

大阪天満宮の歴史とは、

大阪天満宮の創始(御鎮座)は、平安時代中期にさかのぼります。菅原道真公は、延喜元年(901年1月25日)、政治の上で敵対視されていた藤原時平の策略により昌泰4年(901年)九州太宰府の太宰権帥(だざいごんのそち)に左遷されることになりました。

菅公は、摂津中島の大將軍社に参詣した後、太宰府に向いましたが、2年後にわずか59歳でその生涯をとじました。(延喜3年/903年2月25日)

その約50年後、天曆3年(949年)のある夜、大將軍社の前に突然七本の松が生え、夜毎にその梢(こずえ)は、金色の靈光を放ったという。この不思議な出来事を聞いた村上天皇は、これを菅公に縁の奇端として、同地に勅命を以て鎮座されました。

大將軍社は、その後摂社として祀られるようになりましたが、大阪天満宮では、現在でも、元日の歳旦祭の前に大將軍社にて「拂曉祭(ふつぎょうさい)」というお祭りを行い、神事の中で「祖(そ)」と言ういわゆる借地料をお納めする習わしになっております。

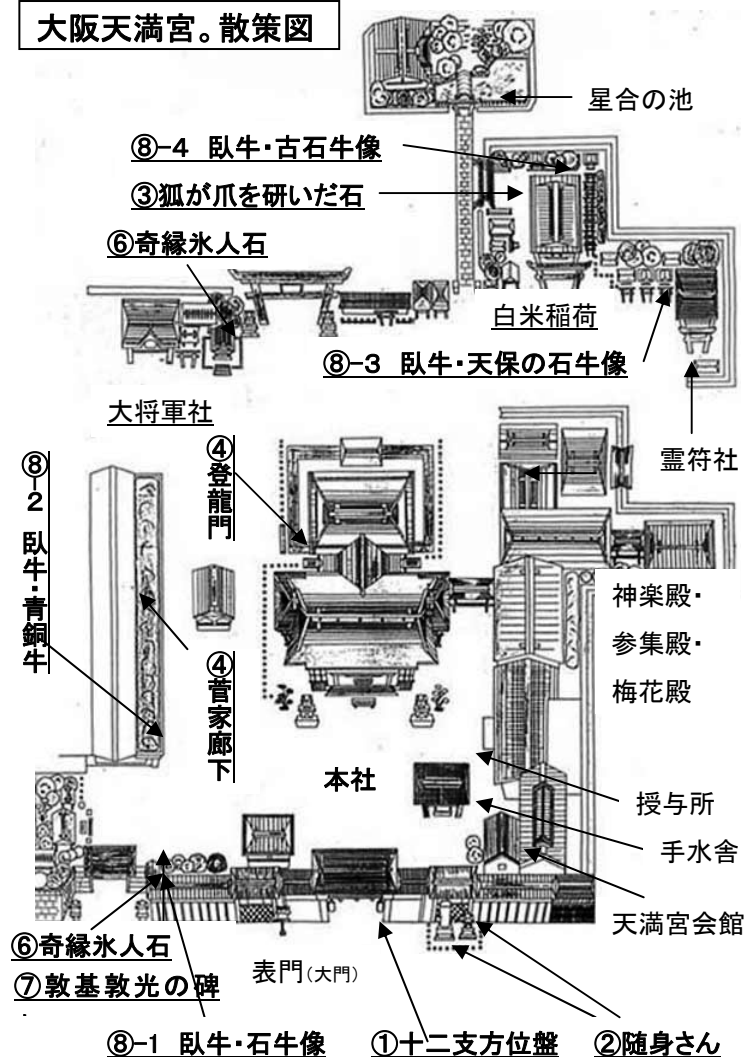
現在のご本殿は、弘化2年(1845年)に再建された物です。

この大阪天満宮は、江戸時代の記録に残るだけで七度もの火災に遭い、なかでも大阪市中を焼き尽くした享保9年(1724年)の妙知焼けや、大塩平八郎の乱による天保8年(1837年)の大火では、全焼致しました。その約8年後に、大阪市中の氏子や崇敬者又献身的な奉仕者によって、現在のご本殿が再建されました。

本殿内も他のお社に見られるようなきらびやかさは見られませんが、先の大東亜戦争にも焼けずに残ったのは、氏子の方々が焼ける自分の家を横目に見ながら「天神さんを焼いたらあかん」と守って下さったおかげです。

(上記：大阪天満宮のホームページより抜粋)

大阪天満宮。散策図



① 十二支方位盤

一鶏に代えて鳳凰の由来一

当宮表門の天井には、直径164cmの大方位盤が吊されています。その十二の方位には、それぞれ十二支の彫像が据えられていますが、西方の酉の位置には、通常の「鶏」ではなく「鳳凰」が配されています。酉年の平成5年、地車講の小西勇さんの御芳志により、この十二支方位盤が色鮮やかな極彩色に復元修復されましたので、この機会に「鶏変じて鳳凰」の由来を紹介させていただきます。

一風変わった方位盤

方位の十二支は、北の「子」から始まり、右回りに当てられますから、東は「卯」、南は「午」、西は「酉」となります。東北の場合なら、「丑」と「寅」の間に当たるので、「丑寅」ということとなります。

ですから、方位盤の西方の位置には、本来ならば「鶏」が据えられるはずですが、何故か「鳳凰」になっているのです。そういえば当宮では、



酉歳の初詣に授与する絵馬や土鈴も、鶏ではなく鳳凰のデザインを用意する習わしです。このように、当宮が鶏を避ける理由については、次のように伝えられています。

左遷された菅原道真公が、太宰府へ向かう途次に、河内道明寺の伯母覚寿尼を訪ねられ、夜を明かして別れを惜しまれたが、鶏の鳴き声に出立を促された。このため、当宮では菅公の御心を思い計って、鶏や鶏卵は御供えには用いない。というものです。この時に道真公が詠まれたのが、あの有名な「鳴けばこそ 別れをいそげ 鶏の音の 聞こえぬ里の 暁もがな」の歌です(鶏が鳴くから別れを急がなければならない、暁になっても鶏の鳴かない里があればいいのに、という意味)。

しかし、この伝承だけでは、二つの疑問が残るように思います。一つは、鶏が鳴いたから夜が明けた訳ではないのに、なぜ鶏を避けねばならないのかという素朴な疑問。いま一つは、なぜ鶏の代わりに鳳凰が選ばれたのかという基本的な疑問です。以下、この二つの謎解きにお付き合い下さい。

不吉を告げる妖鳥

まず、最初の疑問を解くには、昔の人々が鶏に対してどのようなイメージを持っていたのかを考えねばなりません。

全国各地に残る様々な伝承において、神様が嫌う動物として、最も事例の多いのが鶏だという報告があります。それは、古代の日本では、鶏は「不吉を告げる妖鳥」であり、「この世とあの世の境目を、あるいは夜と昼との境目を告げる境界的な鳥」と考えられていたことによるものです。古代人のこのような鶏に対するイメージを念頭において、先の道明寺の伝承を読み直しますと、「境界的な鳥」としての鶏の性格が影響を与えていることが分かります。

鶏は、道真公の京都における栄華の生活と、太宰府での失意の生活の境目を象徴する役割、すなわち前者から後者への出立を告げる役割を担っていたのです。鶏の「不吉」な「境目」を告げる鳥としてのイメージが、道明寺の伝承の背景に隠されていたこととなります。

鶏の姿をした雷

ところで、各地の天神伝説を集めた『天神伝説のすべてとその信仰』(平成四年、太宰府顕彰会)という本には道明寺と同様の鶏を避ける伝承が 17 話も収められています。

また、応永三十二年(1425)に五代将軍足利義量が北野天満宮に参拝した際、不吉を告げる鶏の声が聞こえたという記録もあります(看聞日記)。このように天神様と鶏の話は、各地に残っているのです。

一見、何の関係もなさそうな天神様と鶏が、どうして結び付くのでしょうか。ここでも古代の人々の「雷」に対するイメージがヒントになります。

実は、古代の中国や日本では、雷は鶏の姿をしていると考えられていたのです。(例の太古を背負った鬼の姿の

カミナリさんは、江戸時代に「丑寅」の鬼門と「鬼」のイメージが結び付いて、「丑」の角と「寅」のパンツのお馴染みのスタイルが生まれたのです)。例えば天安二年(858)には雷雨のなか、北野の稻荷社の空中で二羽の赤鶏が闘ったといい(文徳実録)、また万寿四年(1027)には、御所の豊楽院に白鶏に似た雷公が落ちたという記録もあるのです(日本紀略)。

ここまで来れば、話は簡単です。道真公の死後に打ち続いた雷や疫病・地震を、当時の人々は道真公の怨霊のせいであると考え、その怨霊を鎮めるために「天満天神」として祀りました。そこで、天神=怨霊=雷=鶏の連想が働き、天神信仰において鶏が忌避されるようになったという訳です。

大將軍社と鳳凰

次になぜ鶏の代わりに鳳凰が選ばれたのかを考えてみましょう。この謎を解く鍵は、次に紹介する当宮の創祀伝承の中にあります。

河内道明寺の覚寿尼のもとを辞された道真公は、船待の間に摂津の大將軍社に参詣された後、太宰府へ向け乗船された。のちに村上天皇の勅願により、同地に鎮祭されたのが当宮である。

この伝承にみえる大將軍社は、現材も当宮の境内に祀られていますが、大將軍とは、陰陽道という西方の星、太白星(金星)のことです。そして重要なのは、太白星は鳳凰を乗り物とすることです。

また、大將軍社は、太白星を祀る以前は、北辰(北極星や北斗七星)の信仰を中心とする星辰崇拝の社だったことも解っています。承德二年(1098)の「浪速往古図」に、当宮周辺に明星池・星合池・七夕池が描かれ、七夕伝説の要素が色濃く見えるのも、そのためです。となると、七夕伝説に関わる重要な神格として、西王母(織女のモデル)の存在も注目しなければなりません。なぜなら、西王母も鳳凰を乗り物としていたからです。

このように考えますと、鶏の代わりは、やはり鳳凰でなくてはならなかったようです。鶏を避けることも、鳳凰を選んだことも、ともに当宮が創祀された当時の人々の記憶の反映だったのですから。(高島幸次)

②表門の隨身さん 一矢大臣・左大臣一

神社表門の左右にあって主祭神をお護りしている二体の



の御神像を、「かど守神(カドモリノカミ)」あるいは「看督長(カノトサカ)」といいます。

当宮表門の左右にも、高さ約2mの大きな座像が安置されています。しかし、太い格子枠のはまった隨身舎に鎮座されているためか、ご存じない方も多そうです。そこで、この二神像についてご紹介させていただきます。

一. 矢大臣・左大臣

表門左右の二体の御神像は、正しくは門戸守護の神様である豊磐間戸命(トヨイワマドノミコト)と櫛磐間戸命(クシイワマドノミコト)といわれています。しかし、江戸後期の『神道問答』は、向かって右の神像を「矢大臣」、左を「左大臣」というと記しています。また江戸の戯作本などでは、二神像を合わせて「左大臣」と総称しますし、時には「矢大臣」を「右大臣」呼ぶこともあるようです。



江戸時代には、「矢大臣」が一般的な名称だったらしく、居酒屋の腰掛けに掛けて、片足をあぐらのように組んだ酔客を、「矢大臣」と茶化した川柳があります。

「居酒屋の店に呑んでる 矢大臣」

このように片足を組んだスタイルの御神像が多いことから、生まれた異称なのでしょう。

二. 近衛府の隨身

ところで、矢大臣・左大臣は、「隨身」の装束を着けたスタイルが定式となっているため、親しみを込めて「隨身(随神さん)」と呼ばれることも少なくありません。

隨身とは、平安時代以降、皇族や貴族が外出する際に、勅定によって護衛にあたった近衛府の武人をいいます。彼らは、美貌の持ち主で、気だてがよく、馬術など諸般の芸能を見に付け、しかも動作振舞いが優美な者から選ばれたといえます。

「隨身は公家(朝廷)の宝なり」と賞賛され、鳥羽法皇と後嵯峨上皇時代の花形隨身たちを描いた『隨身庭騎繪巻』により、その艶やかな姿を偲ぶことができます。

先の『神道問答』によると、隨身のスタイルは、「闕腋(ケツキ)の袍(ホ)を着し、「巻纓(ケヱイ)の冠」に「おいかけ」を付け「劔」を佩き、「箆」を負い、「弓」を持つと記されています。「闕腋の袍」とは宮中の武人の上衣、「巻纓の冠」も武人の冠で、「おいかけ」は冠の左右に付ける菊花を半切した形の飾りをいいます。

要するに、近衛府の五位、六位の武人の装束に、劔と弓矢を持っていることが、隨身さんの特徴なのです。

なお、当宮の隨身さんも、定式に従って、平安時代の隨身の装束を着け、矢大臣は豹の皮、左大臣は虎の皮を敷いた腰掛けに座っておられますが、あぐらは組まずに行儀よく掛けておられます。ただ、残念なことに、所持されていたはずの、左大臣の弓と、両大臣の矢が、今は失われています。

三. 隨身舎の建立と再建

当宮に、隨身さんが鎮座されたのは、江戸前期のことです。寛文5年(1665)に、本殿以下の社殿を書き上げた史料には、まだ「隨身舎」の名はなく、享保9年(1724)の大火で当宮が全焼した記録にも「隨身舎」は見えません。

しかし、享保11年(1726)3月には「隨身舎二ヶ所」が記録されますから、享保9年から11年までの再建時に、当宮にも隨身舎が設けられたと考えられるのです。そして、元文2年(1737)以前のもので推定される「大坂天満宮絵図」には、表門の左右に「隨身舎」が描かれ、「左大臣」「右大臣」と注記されています。

その後の様子については、当宮の古文書や古記録に、再建や修復の記事が散見できます。例えば、寛政4年(1792)5月に隨身舎が類焼した後、同8年(1796)2月には、堂島の升屋源左衛門を世話人として、隨身舎再建費「金三拾両」が奉納されています。また、天保8年(1837)の大塩平八郎の乱にも類焼しました。まもなく再建されたものの、弘化3年(1846)11月には、西側の隨身舎が再び焼失しています。ですから、現在の東の隨身舎は天保8年以降、西は弘化3年以降の建築ということになります。

四. 浮世絵に描かれた隨身さん

一般に「天神画像」としては、束帯に威儀を正した「綱敷天神像」や「雲中天神像」、あるいは道服姿の「渡唐天神像」などが知られていますが、明治時代には、「隨身さん」を従えた浮世絵も多く描かれました。

下の画は、その一例で、装束や狛犬石台に見える梅鉢紋から、当宮を題材にしたものと考えられますが、明治天皇の龍顔を彷彿とさせる御祭神の面影や、隨身さんの片あぐらなどに、当時流行の様式が窺える興味深いものです。

絵師は、林基春です。明治浮世絵界の第一人者であった歌川芳年の門人で、大阪を舞台に活躍し、明治36年に亡くなっています。この画のほかにも、『大阪名所絵』シリーズに「天満天神社」や「天神祭船御渡り」を描いています。(高島幸次)

③狐の爪研ぎ石



大阪天満宮境内末社の、白米稻荷社回廊の西北隅に、「狐の爪研ぎ石」と言いふるされている高さ約1m、幅50cmの石がある。いかにも狐が、その鋭い爪を立てて搔いたように、数条の穿溝が走っている。

「狐の爪研ぎ石」、何とも面白い表現である。正しく言えば、大阪の玉造

において出土した玉造石、勾玉、管玉を研いだものといわれる。科学的に立証された玉造石、あるいは曲玉砥石という表現は、事実には則したものであるが、天満宮のその場合、あまりにも夢がなすぎます。折角、境内の一隅に置かれていても、何となく無価値な感じがする。

「狐が爪を研いだ石」というと、そこにはロマンがある。

それも稲荷社の薄暗い片隅に置かれ、しめ縄が張られている。稲荷明神と狐、いかにもぴったりだ。

天神さまの「うし」、熊野権現の「からす」、八幡さまの「はと」、稲荷の「きつね」、その中でも稲荷の狐はすっかり神格化して、稲荷と言えば狐を祀ってあると思っている人もいるほどである。

由来、狐には神変不可思議な神通力のようなものを持っているが如くにわれわれは感じていた。

例えば信太の森の葛の葉狐が安倍保名と結婚し、一子をもうけた伝説を主題として歌舞伎、同じく義経千本桜四段目の、静御前が持つ「初音の鼓」に張った狐の皮の子が佐藤忠信に化けて現れて静御前を護り、義経から源九郎狐の名をもらうくだりなど、人々はなんの抵抗もなく、その世界の中に魅了され、深い感動を覚えている。これが即ち人間の持つ夢、あるいはロマンではなかるうか。

子供の頃、浦島太郎、花咲爺、かぐや姫などのお伽ばなしで育てられた私の心の中には、今でもこの夢が生々としている。私の夢を愛し、夢を育てる人でありたい。お伽ばなし的なものを、それなりに受け入れる心と、それを科学的に立証するのと、その何れをとるか。現代的感覚では、おそらく後者に軍配は上がるであろう。

しかし物事には、人生には、夢があるところに妙味がある。それが即ちロマンである。われわれは、このロマンの中に入りこんだ時、別に不思議とも何とも思わず、むしろ素直に、その夢を楽しんでいる。

「狐の爪研ぎ石」、私はこの石の存在を、大阪人のもつ伝統的なうのおいのある心、さらには子供の夢の温存のためにも、この名のままにそっとしておきたい。最近すべてを科学的に立証して割り切ってしまう時代に、もっともっと情操豊かな人間性を希むためにも。

境内の樟の樹々は、五月の太陽の下、萌えるような新緑に輝いている。この緑もやがて、その色を増し秋には新生の緑に、そのところを譲るであろう。年々歳々に同じからざる生命のさだめの中で「狐の爪研ぎ石」は白米社の薄暗い隅っこで、今日も大きな夢を包んで初夏のはなやかな息吹きの中で、ひっそりと変わらぬ姿で立ちつくしている。(大阪天満宮 宮司 寺井種茂)

④菅家廊下と登竜門

大阪天満宮には、菅原道真公のご生涯を十五場面五十一体の博多人形で紹介する展示ギャラリーがあります。この人形は、福岡県の無形文化財保持者であった故小島与一氏の作品で、太宰府天満宮から当宮に寄贈されたものです。昭和六十二年に梅香学院を建てた際に、その展示用通路を設けて「菅家廊下」と名付けました。

本来の「菅家廊下」とは、菅原氏の私塾のことです。菅公の御祖父が、自邸の書斎につながる廊下を教室として私塾を開かれたことによる命名でした。菅公が執筆された『書斎記』によれば「この私塾から育った優秀な人材は百人に近く、学生たちは書斎を『龍門』と呼んだ」といいます。

龍門とは、科挙（中国の官吏登用試験）の試験会場に

あった正門のことですが、もともとは、黄河中流にある險所の地名でした。この急流を上り切った鯉は龍に変身できるという伝承があり、転じて「困難ではあるが、突破すれば立身出世が約束される関門」を登竜門と呼ぶようになったのです。

そして当宮の本社東西に設けられた唐門も、「登竜門」の異称を持ちます。門前に据えられた金灯籠の笠（屋根）には鯉が跳ね、竿（胴体）には龍が巻上がり、まさに登竜門を表す文様が彫られていたことによります。残念ながら戦時中の供出により灯籠は失われたのですが、菅公千百年大祭を記念して、篤志の方が同じ文様の灯籠を再現してくださいました。

このように当宮の「菅家廊下」と「登竜門」は、ともに菅公の学問に深い縁由を持つ命名です。菅公千百年大祭という記念すべき年の「古本まつり」に来宮いただきました皆様に、ご紹介させていただく次第です。

(大阪天満宮宮司 寺井種茂)

⑤大將軍社

道饗祭から大將軍社へ

大將軍社の創祀は、当宮の鎮座よりも二五〇年も遡る。

大化改新を受けて、白雉元年（六五〇）に、孝徳天皇は難波長柄豊碕宮（中央区法円坂）に遷都された。

これ以後、毎年六月と一二月の晦日には、都への四方からの進入路上で、「八衢比古(やちまたひこ)神・八衢比売(やちまたひめ)神・久那斗(くなど)神」の三神を饗応し、「鬼魅(もののけ)」が都に入るのを防ぐ道饗祭(みちあへのまつり)が行われた。当時の人々が最も恐れた鬼魅は疫病、特に疱瘡であった。道饗祭において、疫神である「八衢比古神・八衢比売神」と、異境の悪神を避ける「久那斗神」を祀ったのは、そのためであった。そして、都の四方のうち、最も重要な方角は西北であった。長柄豊碕宮が廃された後、西北の道饗祭の地には大將軍社が創祀された。そして、現在に至るまで、大將軍社では、右の三神に「於富加牟津見(おほかむつみ)神」を加えた四神を祭神とし、六月と十二月の晦日に道饗祭を斎行している。なお、於富加牟津見神は、桃の実の精で、悪気を払う霊力ある神とされる。御伽草子の桃太郎は、実はこの神がモデルであり、退治される鬼は疫病(疱瘡)を象徴している。

星辰信仰と疫神信仰

では、道饗祭の地に、なぜ大將軍社が祀られたのか。もともと、この地は星に神秘的な力を付託して崇拝する「星辰信仰」の盛んな地であった。そのことは、星合池・七夕池・明星池のように星辰信仰にちなむ池名があったこ



とからもうかがえる。

そして、大將軍の神は、実は太白星（金星）の精であった。本来、太白星は、方位を司る「方伯神」であり、その定位置は西方とされていた

しかし、古代の人々が、星辰の天界運行の周期性と、疫病流行の周期性が一致すると考え、星辰が疫病の流行を司っていると信じたため、また、都での疫病流行は西方からもたらされることが多かったため、太白星は次第に疫病退散を祈願する星となっていった。

そのため、長柄豊碕宮が廃された後、この地の人々は、大將軍社を創祀して、疫病退散のための道饗祭を引き継いだのである。

七本松伝承と明星池

大將軍社の創祀から二百年余り経った延喜元年（九〇一）、菅原道真公は同社に参拝した後、太宰府へ船出したと伝える。大將軍神は方伯神、特に西方を司る神であったから、菅公も太宰府への西路の無事を祈られたのであろう。それから、さらに半世紀後の天曆三年（九四九）のある夜、大將軍社の前に突如として七本の松が生え出たという。松の梢は夜な夜な光り輝き、時の村上天皇は、これを菅公に縁りの奇瑞として、大阪天満宮を建立されたのである。この七本松も、当地が松林の広がる場所であったことを表現しているだけではなく、梢が光り輝くことから判るように、やはり星辰信仰の影響を受けた伝承だったのである。

ところで、大將軍社の当初の鎮座地は、現在地とは異なっていた。江戸後期に出版された『摂津名所図会』は、「明星池」の項に次のように記している。

菅神初めて鎮座の地なり。昔この所に靈松ありて、菅公明星とあらわれその梢に降り、この池水に映り給う。ここにいう、明星池畔の靈松の伝承は、先の七本松伝承に響きあう。すなわち、大將軍社は、現在の当宮境内地から二〇〇mほど北方の明星池の畔に創祀されたのである。そして、同社にちなむ七本松の伝承により、天満宮が現在地に建てられた。当時、このあたりは広大な松林が広がり、当初は大將軍の森、後には天神の森と呼ばれたという。

この南北に広がった森林は、周辺の開発に従い、大將軍社を中心とした「北森」と、天満宮を中心とした「南森」に分断されていった。後者が、現在の南森町の地名の由来であることはいうまでもない。

寛文年間の移転

戦国時代から江戸初期には、当宮は度々戦火に見舞われた。特に大坂夏の陣に際しては、当宮は、御神体を奉じて吹田に避難し、この間に創祀以来の社地を失うこととなった。その後、神主・社家の懸命の努力によって、南森の旧地を回復したが、北森一帯の回復は果たせなかったようである。その結果、大將軍社の地は、当宮境外の飛地ようになってしまった。そこで、寛文年間（一六六一～七三）に大將軍社を明星池の畔から境内地に移す

ことになった。この移転に当たっては、かつての長柄豊碕宮の西北を護った故事に従い、境内の西北に鎮らし、その階段・石畳も西北方向につけることになった。現在、当宮の境内社は、すべて本殿に習って南向けに建てられ、大將軍社も例外ではない。にもかかわらず、同社の階段・石畳だけが西北方向を向いているのは、創祀の故事を今に伝えるためであった。

ところが、寛政十年（一七九八）に刊行された『摂津名所図会』は、当宮について「明星池の畔に創祀されたが、寛文年間に現在地に移された」と記している。この記載は、当宮の抗議を受けて、初版以降は「今に至るまで社頭造営の地、所を移さず」と改訂された。同書がこのような間違いを犯したのは、大將軍社の移転を当社のそれと同一視したためであった。（当宮文化研究所 高島幸次）

⑥奇縁氷人石

当宮裏門を入った右手に「しるべの石」が建っている。いわば「迷子情報告知板」とでもいうべき石で、かつては、このようなしるべ石が、繁華な社寺の境内や、橋のたもとに建てられていた。

宮部みゆきの「まひごのしるべ」は、このしるべ石をモチーフにした短編小説である（新潮文庫『幻色江戸ごよみ』所収）。当宮の場合は、正面に「しるべの石」と彫られているが、宮部によると、他に「迷子のしるべ」や「奇縁氷人石」などと彫られたものもあるらしい。「氷人」とは言うまでもなく、婚礼の媒酌人のことである。

石の右側「たずぬるかた」には、迷子の子どもを捜す親が、子どもの人相や服装を書いた紙を張りだし、左側「おしゆるかた」には、迷子を保護した側がその旨を張り付けるのだという。

「天神さんの古本まつり」が、本殿北側の、ちょうど「しるべの石」の真正面で開催されて、今年で三年目になる。長年にわたって親子再会の「氷人」となってきた石が、現在では、読者と古本の出会いを見守っている。これも「奇縁」といえよう。（大阪天満宮宮司 寺井種伯）

⑦敦基敦光の碑文

天満天神祠にはべる 摂州 藤原敦基

訳文：渡し場の近くにある社について土地の人に聞いたところ、いわくこれは天満天神だと。

社を囲む瑞籬に咲く菊花のごとき菅公の繁栄に祝意を述べ、奥深い溪谷の浮草を文道風月の祖である天神への供物としてささげた。

秋の終わる日の夕方紅葉は風にそこなわれて飛び、空が晴れた時というのに木綿が舞うのは雪が風に翻るかのよう。

幾重にも重なった岩に生えている松は老木であって何



年たったか分からない程であり、さかまく波は花が飛んでいるかのようにあって常に春を留めているみたいだ。

平安城の北にあるみたまや北野廟では今もなお道真公の徳を讃仰し、鴨川の北にある古い廟所吉祥院ではさらにその仁愛をたたえる歌を詠じている。

村落の人たちがあちらこちらから一札して祠にやっ来て、たそがれ時に天神への参拝をすませて海辺へと戻っていった。

藤原敦光

《訳文》天神祠の社頭に到って厳肅な思いがする、空模様はもの寂しげではあるがこの地は景色が見事だ。

渡船場のあたりには潮が満ちて来て冷え冷えとした浪が白く、川のほとりでは松が老いておりそこにかかる夕暮れ時のもやは青い。

神祠の基壇は多くの年月を経たことを示しており、その祭神である菅公が大臣の位に就いたのは昔宿星にかなう運命によるのだった。

菊は白い紙銭とまぎれて見分けが付かない程だがその花はもう萎れており、林は錦の傘かと思誤らせるばかりに紅葉しているものその葉は今まさに散ろうとしている。秋三か月の過ぎ行く時間は旅路について帰ろうとも、菅公へのとこしえの祝言を天神祠において唱えよう。

だからこそ蓬萊嶋とも言うべき宮中の貴頭や李膺の登竜門に比せられる立身出世の門を通った文章生らが菅公ゆかりの地を尋ね、天神の徳の風が香ってくるのを遙かに望み高く仰ぎ見るのだった。

⑧ 臥牛像

1、石牛像 (表門西側)

ビフテキのスエヒロが紀元二千六百年(昭和十五年)に開業三十周年を迎えるにあたって、昭和十四年七月に経営者の上島歳末氏が奉納された石像です。牛への感謝をこめて形代を石に刻まれました。以来、毎年春三月にこの臥牛像の前に上島氏一統の方々が参集され、牛祭が斎行されています。



2、青銅牛 (駐車場入口脇)

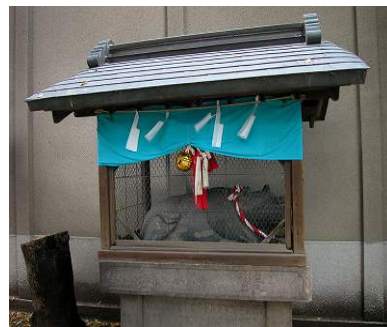


昭和三十一年に、東大阪市の坪庭元次郎氏が奉納されたもの。戎門から入ってすぐ、ガレージ入口の公衆電話横にあり、触れやすいため、お寺の「べんずり(賓頭盧)さん」のように、参拝の方々に撫でられてつるつるぴかぴかになっています。坪庭氏は、ご自分でこの臥牛像を

铸造されたのですが、モデルになったのが天保の臥牛像です。

3、天保の石牛 (白米稲荷社前)

白米稲荷社沸きに屋根つきのお家に臥している石牛像。



奉納年がわかっている牛像の中では最も古いものです。

天保十一年(1840)庚子霜月の奉納です。奉納者の名前が台石のぐるりにずら一と彫り込まれています。南は天王寺村から北は天神

筋町まで、実に多くの人々によって奉納されたことが分かります。とくに島之内の店名や個人名が多く、仲居さんらしい名前も見られます。奉納された天保十一年といえば、当宮では、天保八年(1837)の大塩焼けで被災し、社殿もまだ復興できていない時期でした。

4、古石牛 (白米稲荷社裏)

白米稲荷社裏の昆布商と刻まれた縁があった台石の上にすわっています。非常に素朴な漢字の臥牛像ですが、奉納年その他何もわかりません。果たしてもともと昆布商の台石上に据えられていたものかどうかよく分かりません。台石にもたれるように小さな石地藏(?)さんと石の小狐が寄り添うように置かれていて、一層風情のある景色となっています。



★///// 上記レポートは、当日の資料を元に塾生の林紀公子さんが纏めてくれました。 ★/////

第一回 てんま天神梅香席にて

天神さんで盆梅展がある。梅香寄席があると、落語ファンの塾生の北原さんが提案。大阪の天神さんで初めての「梅まつり」・・・座敷から梅を眺めるのではなく、座敷で盆梅を並べ梅を眺めようという催しとなった。

天神祭りは知っていても、大阪天満宮内をゆっくり散策したことがない。では、天神さんへお参りをといことで、天満宮文化研究所研究員で天満天神お伽衆の永原順子さんに案内いただくことになった。

午後2時に集合して大賑わいの境内をふらりふらりと散策した後に、樹齢200年など見事な枝振りの盆梅展を見学。開催二日目とあってまだ咲き初めの風情。苔むした老木も春の芳しさを枝先に一二輪と灯しはじめたばかり。熟塾でも、いつぞやクエを食べに紀州路へ、見渡す

ばかりの梅の花々が咲き乱れる南部梅林で、2月なのにポカポカ日和に恵まれ、蜂の羽音を聞きながら、梅の木の下で車座になり、なれ鮎をほお張りながらのお花見。姿ばかりか、香りに包まれてのお花見はなんとも贅沢。梅は香りも風情のうち、香りが心を癒すと昨今流行のアロマセラピーどころか何千年も前から中国の人々は梅を愛好し、梅の香りで春を楽しんでいたのだろう。

そして、第一回のおんま天神梅香席も開催。嘶で梅咲かそうというとても芳しい奉納寄席。

先ずはい一昨年末に赤穂浪士討ち入り300年目企画した講談と落語会で大石蔵之助の兜に陣羽織姿で盛り上げてくれた若旦那風の林家花丸さんは「たぬき」を、旭堂小南陵さんは「寛永三馬術の内、梅花折り取りの一席」、上方落語協会の副会長桂春之輔さんの「お玉牛」、笑福亭福笑さんの「初天神」に、特別出演は、「待ってました！」の桂文枝師匠の「百年目」。文枝師匠の「百年目」は一時間の大ネタながら、落語という人情話を切々と聞き入ったという感じで、まさに百年に一度しかきけないと思えるほど円熟していた。特に、番頭と主人のやり取りは、人生経験の浅い若手がどう真似をしても演じきれない奥深さ。口先だけでは表現しきれない文枝師匠のお人柄とあいまって聞かせどころとなり、三百名の聴衆が、「どないなるんやろう・・・」と息をのんで碁盤の上の主人と番頭のやり取りを観戦しているという緊張感さえ漂っていた。

長年奉公をして暖簾分けを前に、いつものように丁稚や手代を前に細々と口やかましい番頭さん、ちょっと用事があるので店を出る。店では堅物の番頭さんは行きつけの店で着替えて芸者衆と共に屋形船で花見見物に出かけたものの、人目につかないようにと船の窓を閉めて目的地へ。岸に上がり芸者衆や太鼓持ちらと騒いでいるところを、近所の医者やとゆっくと花見を楽しみながら歩いてきた主人と鉢合わせた。こんなに派手に遊びまわっているところを主人に見られては、暖簾分けが棒引きになるのではと番頭は店に駆け戻り首を洗っていると、「ご主人様がお呼びだす」と丁稚の声。びくびくと部屋に入ると、部屋の真ん中に座った主人が、「念の為に帳面を見せてもらたが、ちゃんと店は守ってくれているようで何よりや。丁稚があつての番頭、番頭があつての主人、店の繁盛は、それぞれの力を合わせて成り立っていくもの。本家があつての分家、分家があつての本家や」と、暖簾分けは一件落着。「ところで、さっき会った時、お久しぶりでございますとは、どういう意味や」と主人がたずねると、胸を撫で下ろした番頭は「ここで、逢ったが百年目かと思ひまして・・・」

現在・過去・未来を心で結ぶ天神信仰

今年は、無念の死を遂げた道真公が59歳で亡くなられて1100年目。私事ながら、奇しくもそれから一週間後

「博多」に行く機会があり、降り立った駅が「天神」。翌日、思いついて朝早く起きて大宰府の天神さんに出かけて、偶然祭事に立ち会えた。道真公のご遺体を乗せた牛車を引いてきた牛が臥して動かなくなった地を墓所と定め埋葬された上に建てられたという立派な本殿。そこに、十名程の神職が並び祝詞の声に拍手、さらに祭壇へ次々とお供え物が供えられ何やら神妙な雰囲気。やがて雅楽の音色に包まれ梅の簪を髪に翳した巫女さんがゆったりとした神楽に見とれているとそこはかとした芳しい香りが・・・、ふと見上げた青空に枝を広げた早咲きの梅・・・、それこそが京の紅梅殿から一夜で飛んできたと伝えられる御神木「飛び梅」。更に本殿の、梅が咲き始めた園で神童に扮した女性4名の姿を見かけたりと道真公の面影一杯。勿論名物の“梅が枝餅”も賞味した。この梅が枝餅は大宰府についてまもなく御子息を亡くされた道真公をお慰みしようと、老婆がお好きな梅の枝を添えて供されたお餅とか。焼餅風のお餅は熱々で美味。多くの梅が枝餅店が並ぶ軒先に、電車や観光バスから降り立った人の波が溢れている。その人の波が「心」という形をした池の上に掛かる三本の太鼓橋を渡って本殿へ流れ込む。この橋は、過去、現在、未来を「心」で結ぶ天神信仰を映している。

寒風に吹かれながらも厳しい環境の中で、美しく美しく凛として咲く梅の花は、道真公の生き様にも似て愛おしい。無心に咲く梅と共に、天神さんは日本人の心の中に今も生き続けていらっしやる。

(原田彰子記)



参加者 (敬称略)

一般：猪岡めぐり御友人2名・井溪明・市橋敏弘・小澤直子・梶野鋭朗・北村さんご主人・黒岩敦子・黒岩和也・小林伊一・小林和子・古丸勇・末広和子・田倉かほる・武田雄二・中村豊子・西田清盛・早矢仕千春・東口恵子・森亜矢子・吉村哲夫

塾生：阿久根昌夫・井村身恒・大森史子・鍛冶睦子・北川弥寿子・北村千代江・北原祥三・塩谷圭三・清水千代子・杉山英三・竹内英作・辻本信子・林紀公子・原季美子・原田彰子・平野康子・堀内紀江・水本光洋・村上蕪芳・森川千代子・山口信男